地域・コミュニティ活動助成

一般社団法人 ちろる

福島県二本松市

東日本大震災の高齢避難者と地域の繋がりを つくる「食を通したコミュニティづくり」



団体設立経緯

一般社団法人ちろるは、誰にとっ ても住みやすい地域をつくることを 目的に活動する団体です。役員1名 とスタッフ1名の専任2名しかいない 小さな団体です。2名ともに、以前 はどの市町村にもある地域福祉を 推進する団体で勤務していました。 組織に所属しているために目の前の 困っている方に対して迅速な対応が できなかったり、支援対象者に寄 り添った支援ができなかったりする ことが多々ありました。それならば 個人や地域に対して、より密接に縛 りなく関わることができるようにと 法人を設立しました。

活動概要と活動対象範囲

福島県の二本松市では避難者を 対象とした活動、太平洋沿いの相 双地区では帰還者向けの活動をし ています。

メイン事業として、東日本大震災 および福島第一原発事故の被災者 の方が、新しい生活環境で地域や 他者とつながりと生きがいを持ちな がら生活できるように、食やモノづ くり、運動を通した様々な活動を実 施しています。

また福祉をもっと身近に感じても らうために、中学校や高校で福祉 の出前講座やボランティア活動の実 践の場づくりを展開しています。

活動に至った理由や背景

日々の生活を豊かにするためには 同世代のみのつながりではなく、さ まざまな世代ともつながりを持つこ とが大切です。しかし二本松市に 避難して災害公営住宅に住んでいる 方の多くは高齢者であり、若い世代 との交流機会がありません。

高齢者と若い世代とで茶話会な どを企画しても、参加者の人数のみ が評価の主点になりがちで、本当の 意味での交流は図れないのではと 考えました。そこで、高齢者の得意 な分野で若い世代と定期的に関わ ることができるような活動を企画し ました。

活動内容と成果

本助成金を活用して、2つの事業 を実施いたしました。その1つが野 菜づくりです。

●避難者が先生となる「野菜づくり」

多くの高齢者が震災前、それぞ れの地元で野菜づくりをしていまし た。その経験を活かして子どもた ちの野菜づくりの先生になってもら い、一緒に野菜をつくり、収穫して、 秋には芋煮会を開催するというもの です。子どもたちは、市内で認定こ ども園などを営む「学校法人まゆみ 学園 |の幼児を中心に参加しました。

4月16日に最初の集まりを持ちま した。畑の事に関していつの時期 に何を植えればいいのか、そのた めにどのような準備をするのかなど を避難者(以降、子どもたちにならっ て「畑の先生」と表記)に畑を見ても らって、どの野菜を植えるのかをご 検討いただきました。畑の先生の中 には震災後初めて鍬を握るという方 もいて、また畑で野菜づくりができ るという事に喜んで、思わず畑を耕 してしまう姿も見られました。

2回目は5月14日に集まりました。 子どもたちと一緒にポットに種をま き、畑の先生が鍬を持って畑を耕し たり肥料を畑にまいたりと、発芽し た種を移植するための準備をしまし た。子どもたちは普段口にしている 野菜が、元々は小さな種であること に驚いた様子を見せていました。畑 の先生がその様子を、孫やひ孫を 見るような優しく見守っている姿が 印象的でした。

当初は畑の使用は有料の予定で したが、土地の所有者が避難者の 方を元気にするための役に立つの であればと、無償で借りることがで きました。また、二本松市内で肥 料などを製造販売している株式会 社サントーマスさんが、避難者の生 きがいをつくることや異世代交流と









(上)4月、野菜づくり事業の初回。久しぶりの畑仕事に張り切り、鍬の勢いが止まらない (中)5月、子どもたちと一緒にポットに種をまく

(下)6月、芽を出した苗を畑に植え替え

いう活動の趣旨に賛同、肥料を無 償で提供してくださいました。

3回目の集まりは6月11日、種が芽 を出したころ合いを見計らって開催 しました。2回目の集まりから、子 どもたちと畑の先生たちが定期的 に種に水をやったり、畑の先生たち が畑の草を刈ったりしてくれていま Lto

子どもたちにとっては待ちに待っ た畑への植え替えです。畑の先生 たちの言う事をよく聞いて、丁寧 に畑に移植していきます。子どもた ちも楽しそうに苗を植えていました が、それよりも畑の先生たちが子ど

もたちと一緒に畑仕事ができること がうれしそうでした。

秋になり、11月4日に収穫祭を開 催しました。まゆみ学園の子どもた ちだけではなく保護者も一緒に参加 してもらいました。それまで畑で精 魂込めてつくった野菜、特にサツマ イモを抜くときには、土の中から顔 を出したサツマイモに子どもたちは 歓声を上げていました。

野菜を収穫したら、その成果物 を使った収穫祭です。調理は二本 松市内でボランティア活動をしてい る方に協力をお願いして、おいしい おにぎりと芋煮の鍋をつくってもら





収穫したお芋で芋煮会。コロナ 対策のためテーブルを分けて開 催したが、一体感のある温かい 空気に包まれた

いました。参加者全員を同じ席に集 めたかったのですが、新型コロナウ イルスの感染予防のために、まゆみ 学園の保護者と子どもたち、二本 松市内の4カ所の復興公営住宅で 生活する避難者の皆さん (畑の先 生方含む)が、別々のテーブルを囲 まざるを得ませんでした。

子どもたちは野菜を収穫したので お腹が空いたのか、小さな口を大き く開けておにぎりを頬張って、芋煮 をおかわりしていました。その様子 を見ていた避難者の方が大きな笑 い声を上げ、テーブルは離れていて もお互いはつながっていることを実 感しました。

もし子どもたちと避難者とで、事 前の交流もなくいきなり収穫祭を やっていたとしたら、テーブルごと に食事をして互いに交流もない、何 の意味もない企画になっていたかも しれません。春先から秋まで半年 以上、一緒に畑で野菜づくりをして きたつながりがあるからこそ、子ど もは自分のじいちゃん、ばあちゃん

のように畑の先生を慕い、畑の先生 も子どもたちを孫やひ孫のように可 愛がるような関係性が生まれたのだ と思います。

子どもたちの多くは親と子どもの みの世帯で、じいちゃん、ばあちゃ んとは離れて暮らしています。避難 者も震災前は子どもや孫と暮らして いたとしても、現在は高齢者のみ世 帯もしくは独居で、子どもたちや孫 たちとは離れて暮らしている方がほ とんどです。だからこそ畑での野菜 づくりを通して、お互いに親密な関 係を築けたのだと思います。

「子どもは地域の宝」なんて言って も、どうしても核家族中心の社会で は育児の負担は両親、特に母親に 集中してしまいがちです。親より上 の世代も子どもの成長に関わること で、地域で子育てをする第一歩に なりました。

●学生と避難者が一緒に支える 「学生食堂」

そしてもう1つ、本助成金を活用し て実施した事業が「学生食堂」です。 学生が避難者と一緒に食事をつく り、食べて、交流を図るという内容 です。

当初の予定では二本松市内の高 校生や大学生の参加を想定してい たのですが、高校ではコロナの感 染防止のために学外での活動を制 限しているということで、大学生の みの参加となりました。つくった食 事を一緒に食べるという部分に関し ても、感染リスクを抑えるためにつ くるだけにして、食べるのは持って 帰ってからというように変更。参加 者が調理の際、味見をするとき以 外はマスク着用を徹底しました。福 島県内にまん延防止等重点措置が 出ている期間は学生のみで食事を つくり、避難者には食事を取りに来 てもらい、その際に交流を図るよう にするなど、避難者や学生が少しで も安心して参加できるような環境づ くりに努めました。

毎月1回、災害公営住宅の集会 場で開催しました。スタート時の春 先は、避難者と学生と年齢が離れ ているためにどのように話したら良 いのか、接したら良いのかもわから ずに学生だけで固まっている姿が見 られました。しかし毎月顔を合わせ ているうちに、学生も自分の親以上 に年齢の離れた避難者とも自然に コミュニケーションが取れるように なってきました。2021年の年末を迎 える頃にはすっかり打ち解けて、避 難者と高齢者が笑顔で料理をつく る様子が見られました。

一緒に食事をした後には避難者 から学生へ、ただ雑談をするだけ ではなく、震災の記憶を風化させな いための取り組みも進めました。東 日本大震災の発生時に何をしてい たか、避難元市町村から避難所、 仮設住宅、災害公営住宅など、ど のように生活の拠点が変遷してきた のかを学生に伝えてもらいました。









毎月1回、災害 公営住宅の集会 ながら、交流を 深めた

避難者の方から、学生食堂が始 まるまでは学生と街中ですれ違って も挨拶もなかったのが、学生食堂 で顔馴染みになった学生さんと出 会った際に、向こうの方から「おは ようございます。この前はお世話に なりました」と話しかけてきてくれ たことがうれしかったという声もい ただきました。世代を越えて挨拶 や日常会話が生まれるのは、地域 におけるコミュニティの活性化の第 一歩です。

課題と解決方策

活動を涌して一番の課題は、やは り新型コロナウイルス対策でした。

避難者は前述のとおり高齢者が 多いので、万が一感染でもしようも のなら重篤化しやすいし、子どもや 学生に参加を呼びかけるのも安全 性を担保できないので、法人として は積極的なアプローチができません でした。

当初は学生と避難者が集会所に 集まって食事を一緒につくる、食べ

る、交流するという一連の流れを考 えていました。しかし、まん延防止 等重点措置が出ている最中に、つ くる時にも密になれば、食事をする 時にはマスクを外さなくてはなりま せん。そこで学生のみがつくり、避 難者は食事を取りに来てもらい、お 渡しするときの交流という形にしま した。当初想定していたよりも学生 も大学生のみ、交流機会も縮小せ ざるを得ませんでした。

しかし学生食堂を休みにするの ではなく、やり方を工夫して実施し 続けたことで、避難者も学生もお互 いに毎月顔を合わせて交流できる のを楽しみにしていました。

今後の予定

避難者と子どもや学生とのつなが りは始まったばかりです。せっかく 生まれたつながりが継続されること を、避難者も子どもたちも学生も希 望しています。

野菜づくりについては、畑は引き 続き無償で貸与いただき、肥料や 苗に関して協賛してくださる企業も います。現状は無償で提供している 学生食堂も、参加費をいただく形 で実施できれば食材代程度は賄う ことができます。コミュニティの形 成、強化のためにも、今後もどちら の事業も継続して実施していきたい と考えています。

一般社団法人ちろる

2018年3月法人設立/メンバー数:14人/代表者:鈴木 有里絵(すずき・ゆりえ)

●〒969-1301 福島県安達郡大玉村大山字柿崎100-7

☎080-5226-0015 **☑**chiroru2018@gmail.com

chiroru2018.com

私たちは、東日本大震災の被災者のつながりと生きがいづくりを目的として、料理 やモノづくりなどを通した事業を手がけています。また福祉の裾野拡大を目的に、 幼児から大学生まで座学と実践の場を提供しています。

10 2021年度 住まいとコミュニティづくり活動助成